

# 日米で時代築いた音を

昭和の時代に日本とアメリカ両国の国民的音楽家として親しまれた木琴奏者、平岡養一の足跡を、マリンバ奏者の通崎睦美が評伝「木琴デイズ―平岡養一『天衣無縫の音楽人生』」（講談社）にまとめ、出版した。かつて平岡が使っていた楽器や楽譜を譲り受けて演奏活動を行っている通崎だからこそ見える音楽家としての視点もふんだんに盛り込まれた一冊になっている。

（安田奈緒美）

奏から、楽譜を読み込んで理論的に構築する演奏への劇的な変化を指摘する。評論家ではなく、同業者だからこそ言えることがあるのではないかと思った」

◆ ◆  
現代、同じ木製の鍵盤楽器としては木琴よりも柔らかくて残響の多いマリンバがクラシック音楽界に浸透し、プロの演奏家も多い。

しかし、平岡が木琴でクラシック音楽を牽引した時代をたどった通崎は「木琴は音が『立つ』のでピアノとの相性も良くソロ楽器に適している。私自身、演奏会で木琴を使う機会が増えました」

新たな「木琴デイズ、木琴の時代を作っていただけら」と話している。

## マリンバ奏者通崎睦美が評伝

そのとき使ったのが平岡が愛用していた木琴。やがてその楽器を譲り受けることとなり、「一時代を築いた平岡と木琴の話を今、活字で残しておかなければ」という使命感にかられたという。エッセイストとしての顔も持つ通崎だが、評伝を書

明治40年生まれの平岡は独学で木琴を学び、慶応大学を卒業後、昭和5年に單身渡米。全米ネットワーク「NBC」専属アーティストとなり、日米開戦まで10年9カ月間、毎朝ラジオのレギュラー番組で放送を続けた。米の少年少女は「ヒラオカの木琴で目を覚ます」ともいわれたほどだ。

戦中は帰国して日本各地で演奏を続け、慰問活動にも参加。戦後になると国内オーケストラと共演したり、NHK「紅白歌合戦」の前身「紅白音楽試合」に出演してアメリカ民謡を披露するなど国民的音楽家としての存在を強めた。通崎は「70代以上でしょうか。一定の年齢以上の方ならよく覚えていると思うのですが、若い世代になると音楽を勉強している人でもその名前が知られていない」と話す。



日本を代表するマリンバ奏者の一人である通崎は、平成17年、井上道義が指揮する東京フィルハーモニー交響楽団の定期演奏会で紙恭輔の協奏曲を演奏した。



平岡養一が使っていた木琴の前に立つ通崎睦美。膨大な量の資料にあたり音楽家の視点を取り入れた評伝を書き上げた

## 国民的奏者・平岡養一の足跡『木琴デイズ』